

——「置かれた場所で咲きなさい」渡辺和子著——

渡辺和子さんは29歳で修道会に入ると、すぐアメリカに派遣され、帰ってくると岡山のノートルダム清心女子大学に派遣、翌年には学長に任命されます。弱冠36歳でした。これまでの学長は、初代も二代目もアメリカ人の70代後半の方。前任者たちの半分の年齢にも満たない異例の若さで、卒業生でもなく、地元出身でもないのに、大役(重責)を負わされたのです。当時は、周囲からの風当たりも強く、大変な苦勞をすることになります。



「こんなはずではなかった」という思いとともに、いつのまにか「くれない族」になっていったそうです。「あいさつしてくれない」、こんなに苦勞しているのに「わかってくれない」「ねぎらってくれない」・・・と不平不満に悩まされるようになったのです。そんなとき、一人の宣教師が短い英詩を手渡してくれました。

「置かれた場所で咲きなさい」この詩との出会いが彼女を変えていきました。

置かれた場に不平不満を持ち、不幸になっていては、環境の奴隷でしかない。

人間と生まれたからには、どんなところに置かれても、そこで環境の主人となり自分の花を咲かせようと、決心することができました。それは、「私が変わる」ことによるのみ可能でした。

「咲くということは、仕方がないと諦めることではありません。それは自分が笑顔で幸せに生き、周囲の人々も幸せにすることなのです」と続いた詩は、「置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです」と告げるものでした。

「置かれたところ」は、つらい立場、理不尽、不条理な仕打ち、憎しみの的である時もあることでしょう。信じていた人の裏切りも、その一つです。

人によっては、置かれたところがベッドの上ということもあり、歳を取って周囲から“役立たず”と思われ、片隅に追いやられることさえあるかもしれません。そんな日にも咲く心を持ち続けましょう。

「置かれたところで咲く」という生き方は、著者だけでなく学生たちにも波及しました。

結婚しても、就職しても、子育てをしても、「こんなはずじゃなかった」と思うことが、次から次に出てきます。そんな時にも、その状況の中で「咲く」努力をしてほしいのです。

どうしても咲けない時もあります。雨風が強い時、日照り続きで咲けない日、そんな時には無理に咲かなくてもいい。その代わりに、根を下へ下へ降ろして、根を張るのです。次に咲く花が、より大きく、美しいものとなるために。

読み進めると、後半で幼少時代の衝撃エピソードが…！

著者のお父様は、かの昭和の大クーデター(未遂)、二・二六事件の犠牲者であり当時陸軍大将で教育総監だった渡辺錠太郎氏。

事件当時、自宅を反乱軍の将校が襲撃。著者は弱冠 9 歳。お父様と共に寢床に寝ていた早朝、怒号と共に目が覚め、お父様は枕元の襖ふすまの中のピストルを取り応戦、咄嗟とっさに 9 歳の娘を座卓の影に隠しました。著者の眼前 1mでお父様は 43 発の銃弾を受け殺害されたのです。なんという壮絶な体験でしょう。長じてカトリックの道に進むのですが、いくら修養を積んでも恨みは消えなかったそうです。(2.26 事件から 50 年後、意を決して、父をあやめた将校らの法要に参列されます)

順風満帆な人生などなく、思いがけない穴がポツカリ開くことがあります。

それは病気であったり、大切な人の死であったり、他人とのもめごと、事業の失敗など、穴の大小、深さ、浅さもさまざまです。その穴を埋めることも大切かもしれませんが、穴が開くまで見えなかったものを、穴から見るといふことも、生き方として大切なのです。

私が一番つらかったのは、五十歳になった時に開いた「うつ病」という穴でした。この病のつらさは、多分、罹かかった者でなければ、わからないでしょう。キリスト教は自殺を禁じていますが、シスター道 20 年以上でも自殺を思い至ったほどの辛さだったそうです。

入院もし、投薬も受けましたが、苦しい二年間でした。その時に、一人のお医者様が「この病気は信仰と無関係です」と慰めてくださり、もう一人のお医者様は「運命は冷たいけれども、摂理は温かいものです」と教えてくださいました。「摂理」——この病は、私が必要としている恵みをもたらす穴と受けとめなさいということでした。

かくて病気という人生の穴は、それまで見るができなかった多くのものを見せてくれました。それは、その時まで気づかなかった他人の優しさであり、自分の傲慢ごうまんでした。私は、この病気によって、以前より優しくなりました。他人の弱さがわかるようになったのです。

数年前に患った膠原病こうげんびょうも然り。治療薬の副作用で私は骨粗鬆症になりました。胸椎の八番目と九番目がつぶれ、とうとう十一番目の骨がなくなっていました。それはもう、ベッドから起き上がれないほどの痛みです。ようやく歩けるようになりましたが、私の身長は以前に比べ 14センチも縮んでしまったのです。いくら老年になったとはいえ、わが身が不自由になるのはつらいことです。

でも、嘆いても何も変わりません。嘆いた分だけよくなるのなら、いくらでも嘆けばいい。しかし、悩みというのは、嘆いた分だけ大きくなっていくのです。悩みを抱えている自分もまた、いとおしく思うことです。

幸せは自分の心が決めることです。人が幸せにしてくれるのを待っていても、年を取るだけ。自らが咲く努力をするしかありません。でも、どうしてもここでは咲けないと見極めたら、場所を変えたらいい。その自由は奪っていません。私の教え子の中にも、離婚をして幸せになった、あるいは転職をして幸せになった人もいます。ただし、置かれた場所のせいばかりして、自分が変わる努力をしなければ、決して幸せを得ることはできないのです。